
Chaos!!

オズワルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Chaos!!

【Nコード】

N0544BA

【作者名】

オズワルト

【あらすじ】

俺は藤崎正太郎。絶賛独り暮らし中の高校二年生だ。独り暮らし中ってこと除けば、俺は比較的平均な、男子高校生の日常を歩んでいたと思う。

自称未来人のアイツが俺の家に来て来るまでは。

俺が将来独裁者になるだつて？歴史の決定事項？特異点？知らねーよ、なんだよそれ。

そして次から次へとやってくる変人奇人超人ども。

ああ、さようなら俺の青春……

チクシヨウ！！なんでもありなドタバタカオス系アクション活劇、
開幕だ！！

Case 1 未来人

未来人がやってきた。

昨日、俺の家に。

「ねー、ちよつと。おかわりくれない？」

家庭用ゲーム機をやってる時だった。いきなり窓の外が光ったと思ったら、一人の人間が俺の家のベランダに侵入していた。

「ねーってば、聞いてんの？」

そいつはずうずうしくも、俺の家に上がりこみ、衣食住を要求してきた。

「つーか、そもそも未来人ってなんだ？わけわからすぎる。なんだ、タイムスリップしてきたってことなのか？ いや、そういえばそんな感じのこと言ってたな。小さなブラックホールを作ったんたらかんたら……信じられないが。」

「ねー、正太郎。おかわりちょうだいよー」

なんでこんなしょーもない家に来てんだよ。何も珍しいもんはねーぞ、未来人。しかも朝っぱらから飯を集りやがって。

「うるせえなあ。メシくらい自分でよそえよ」

俺はちやぶ台の横にある電子ジャーを指差した。

「えー、いいじゃん。よそってよお」

「黙れ」

「もう。いけずう」

しかも女だし……ちよつと可愛いし。

「はあ……なんなんだよ、お前はさ」

「何って、未来人だよ」

あたりまえじゃないか、というようにその女は言う。

「いや、もう、それはいい。目的とかだよ。お前がなんでここに
いるのか」

「前も言ったでしょ？ 正太郎を立派な独裁者に育て上げる為にだ
よ」

「嘘をつけ」

「嘘じゃないよ。本当の事だよ。正太郎は、将来絶対に独裁者にな
るんだ。世界の全てをたつた一人で牛耳るんだ。その時に間違った
方向にいかないように、私がサポートするの。それにしてもこのこ
飯、おいしいねえ」

わけわからん事をこの自称、未来人は言う。

俺が独裁者？ ありえない。俺は危険な人生を歩むつもりはない
んだ。そもそも、今の世の中、独裁者なんてありえないだろう。
「やっぱりコシヒカリが一番いいねえ。未来じゃ全然食べた事なか
ったけどさ」

本当に上手そうに食うんだな、こいつは。

未来からやってきたというそいつを見て、俺は思う。

俺は藤崎正太郎。高校二年生。親元はなれて、一人暮らし中。父さ
んと母さんは海外で仕事をしている。中学生の頃、俺もそれについ
ていくはずだったが、日本に残りたかった俺は、頼み込んで日本で
一人暮らしをすることを許可してもらった。寛大な両親で本当によか
った。

俺が今住んでいるのは家族三人で暮らしていた頃から使っている
3LDKのマンションだ。一人で暮らすにはちよつと広すぎて、た
まに寂しくなる。

生活費は毎月一度、銀行口座に振り込まれる。それ以上のものは
ない。小遣いが欲しければ、バイトをしろつてことだ。

元から放し飼いみたいな感じで育てられた俺は、幸運にも道にも

誤らずにやってこれた。公立中学で楽しく馬鹿らしく過ごし、高校で勉強に励みつつもバイトや遊び奔走し、自分で言うのもなんだが、なかなかいい毎日を送ってきた。

昨日までは。

「ねえ、君が藤崎正太郎？」

昨日の午後八時。そいつは、突如ベランダに不法侵入をかましてきやがった。

「なんだお前。どっから入ってきた？」

その女は、見るからにおかしかった。

まず、服装。街中でお目にかかったことないような、露出の無駄に多い格好。ビキニを着て、それにブーツを履いて、ガウンを羽織る。それだけ。スタイルもそこにいいから、目のやり場に困るとても、まともな奴がするような服装じゃなかった。

まあ、いつちゃんだけど、可愛かった。目が大きくて髪は肩の辺りまで掛かっている。唇は……いや、そんな事を考えている場合じゃねえ。そもそもだ。

「変態か？」

「ちがうよ。私はね、未来人なんだ」

俺の気のせいだったみたいだ。

こいつはただの変態じゃない。電波属性まで持っている、ハイレベルすぎる変態だ。

「よし、わかった」

「わかつてくれた？ よかったあ。正太郎が物分りのいい人で」

「それじゃあな。風邪引くなよ」

俺は室内に入り、ガラス戸を閉めて鍵をかけた。

「え、ちよっと、しょうたろー！」

関わらない方がよさそうな人種だという事は一瞬で理解できた。不法進入で露出狂でおまけに電波。永遠に接点なんて欲しくなかった。

俺が買ったばかりのロボット格闘ゲームの続きでもやろうかと、テレビの前に戻った。窓の外から声があるが、気にしない事にした。ベランダに侵入できたんだ。きつと、帰る事だつてできるだろう。

俺が床においていたコントローラーを手に取るうとしたとき。

「ねえ、無視しないでよ！」

などという声とともに、床から腕が生えてきて、コントローラーを奪っていった。

「はあ？」

信じられな過ぎて、対して驚いてもいなさそうな声を俺は発していた。

そう、生えてきた。五本の指、手の平、手首、腕、肩、頭と胴体。その他もろもろといった順番で、電波女が床から生えてきたのだ。俺のコントローラーを片手に持ってた。

「ひどくない？ 話も聞かないで乙女を外に締め出すなんて」

乙女？ 何言ってるんだこいつ。もはや人間ですらねえだろ。

「無駄だよ、正太郎。私にはこれがあるから」

電波は左手に持っていたコンパクトみたいなものを俺に向けてきた。

「超高性能万能ツール携帯版、『できる君』。これさえあれば、できないことはないんだから」

女が誇らしげに胸を張る。

「馬鹿が、お前は」

「馬鹿じゃないよ！こうなったらできる君で……」

女がコンパクトを開き、なにやらいじりだした。

次の瞬間。

「え？」

俺は、雲の上にいた。夜空が目の前にある。月がでかい。満点の

星空が見える。

そして、重力に負けて、身体が落下を始めた。

「うああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

滅茶苦茶に叫んだ。身体が落ちてく。何も無い。あそこに光って見えるのって飛行機か。

え、マジでここって空なのか！？

「どう、これで信じた？」

横をみやると、さっきの電波が俺の隣で共に自由落下していた。

「あ、ちなみに気圧の差はできる君でなんとかしといたから」

「お前の仕業かよ！」

「もちろん！」

女がふぶん、と鼻をならす。正直、答える選択肢は一つしかなかった。

「ああ、信じる、信じてやる！だからこれ、なんとかしろよ！」

このままだと死ぬ！「信じる」って言わないと絶対に死ぬ！

「うん。わかった」

再びコンパクトが操作される。数秒後。

「うわっ！」

俺は自宅の床に激突した。

「いつて……」

尻を強打したが、それだけだった。痛いだけだ。骨が折れたりなんかはしていない。

とりあえず、無事に生きて家に戻ってきたみたいだ。

「ね、すごいでしょ。できる君って」

できる君ってなんだよ。ネーミングセンスが意味不明すぎる。

いや、それ以前に、この電波ゆんゆんの不法侵入女はなんなんだ？

「……お前は誰なんだよ」

「私はレイラ。未来人だよ」

これが全ての始まりであり、俺の青春の終わりだった。

Case 2 独裁者

で、その未来人の言う話では、俺は将来独裁者になる、らしい。

「本当はそんな事止めさせたいんだけどさ、正太郎が独裁者になるのは歴史の決定事項なんだよね」

結局、三合炊いた飯をそいつは一人で食いやがった。

相変わらず、服装は露出の高いビキニとガウンだ。何を考えてるのかわからない。俺の服はきついらしい。主に胸元が。あと、ズボンにはきたくないらしい。

うっかり気を抜くと、胸元に目が行ってしまいそうだ。踏ん張れ、俺の理性。

「決定事項って、どういうことだ」

「なんていうのかな、歴史の必然、みたいな。どんなに未来からタイムマシンで過去に言って歴史を操作しようとしても、かえられないことがあるんだよね」

未来人 レイラは「できる君」とやらを操作した。

スイッチも入れてないのに、勝手にテレビが起動した。画面に映っているのは歴史の年表。社会の教科書とかに乗っているやつだ。ところどころに赤い線が引いてあって、それが点滅してる。

「他にもそういう人を上げるとしたら、正太郎以外だったら 例 えば、ヒトラー。彼の行動は全て、歴史の必然だった」

ヒトラーってのがどんな人間か、具体的な人格はわからないが、やった事は知っている。

「アメリカ大統領だったケネディとかもそうだよ。ケネディって暗殺されたでしょ？ でも、その時の銃弾の軌道はおかしな方向に捻じ曲がってた」

「ああ、それは俺もどつかで聞いたことあるな。何度も弾丸が曲がったとしか言いようのない命中の仕方だったってやつだよな……それも必然とか言うつもりなのか？」

「もちろん。今の世界に残っているあの弾丸の軌道は、タイムマシンである時代に行った人間が色んなことをやって、弾丸が到達しないようにと妨害した結果なんだよね。超能力とかで。結果は失敗。何をやっても弾丸はケネディの頭部をぶち抜いて」

「おい、待て。超能力者ってなんだ」

「この女、さらつとんでもない事を言いやがったぞ。」

「未来じゃ普通なんだよ。超能力者」

もう未来って言えばなんでもありだな。

「で、正太郎が独裁者になるのはそれと同じように決定事項なんだよね。特異点、だったかな。だったら、悪い独裁者じゃなくて良い独裁者になつてもらおうっていう、結論に至ったんだ」

「どこから突っ込んだらいいのかわからん」

「ホントの事だつてば」

「そんな事があつてたまるか」

俺は席を立ち、通学鞆を手に取った。

「どこ行くの？」

「学校だよ、学校。俺はな、独裁者なんか絶対にならないし、歴史の必然なんてのも関係ないし、もしも未来人が存在してたとして、そんなのも俺は一ミクロンたりとも関わりたくないんだよ。俺はな、高校生なんだ。朝日が昇ったら飯を食って学校に言つて、クラスメイトたちと面白おかしく毎日を過ごし、先生には適度に媚売って内申点もらつて、放課後はバイトの先輩の自慢を聞きつつも愛想笑いを浮かべ、店長の理不尽な要望を聞きつつも心の奥底では舌打ちして、夜になつたらドラマを見てニュースを見てNHKのドキュメンタリー見て泣いて、それでメシ食って風呂入って寝るんだ。俺は忙しいんだ。青春を謳歌しなくちゃいけないんだよ。お前みたいな気が違つてるような奴と関わってる暇なんてな、俺にはこれっぽっち

も」

「別にいいじゃん、そんなの」

レイラが寄ってくる。あからさまに腕で胸元を寄せ上げながら。

「ねえ……そんなことより、私といいこと、しない？」

上目遣いで俺を見てくる。さつきまでは全く見せなかった、実も蓋もない言い方をするなら、滅茶苦茶にエロイ表情と声で言い寄ってくる。色々とヤバイ。主に俺が。

レイラは立派にむちむちしているくせに、要所要所はしつかり引き締まっていい。身長は低い。百六十センチもないだろう。俺は百七十センチ。常に俺を見上げる形になる。その顔はどちらかと言えば童顔で、なんていうか、いろいろとミスマッチが……俺のストライクゾーンが狙い打ちに……。

「うるせえ、ふざけんのも大概にしやがれ！」

俺は感情をごまかす為に怒鳴り散らし、半ば走るように家を出て、鍵を閉めた。

くそ、あの野郎、遊んでやがる。絶対にそうだ。だってそうにきまつてる。あの表情、エロイだけじゃなくて、楽しんでいるみたいだった。

つつか、昨日から一体なんなんだ？

悪い夢でも見てるとしか思えない。実際、全部幻覚なのかもしれない。最近、食生活が乱れつつあるのが原因だろうか。いや、そうであってほしい。今日はちゃんと野菜を食べよう。ビタミンを取ろう。牛乳を飲んでカルシウムも取ろう。魚も食おう。インスタント食品は控えよう。一刻も早くこんな妄想からおさらばしたい。

エレベーターに乗って、一階へのボタンを押す。このマンションは十三階建てだ。俺の住んでいる部屋は八階。そこそこに景色がいから、俺は気に入っている。

「はあ……ありえねえ」

「そうそう。ありえないよね。まさか乗ってくれないなんて」

目の前に、ドアから頭だけ生えているレイラがいた。

「……………」

「あそこはさあ、もう少し気の利いた切り返しをすべきだと思うの。怒鳴り散らして逃げるなんてサイテー。女の子のこと何にもわかってないでしょ？ 私だって、ちよつと恥ずかしかったんだから」

擬音を使うんだったら、によきによきか。とりあえず、レイラが這うようにして、エレベーターのドアから生えてくる。片手には例のコンパクト。もう、好きにしるって感じた。

「ねえ、聞いてんの？」

「え、あーはいはい、聞いてますよ」

「冷たすぎでしょ。私、まだふいふていーんの乙女なのに」

こいつ、下手すりゃ中三？ さすが未来の中学生はモノが違う…

…いや、そこに驚いている場合じゃねえ。

「ていうかさ、何なお前。ついて来る気なの？」

「あたりまえじゃん」

なんでこいつは、一々自身ありげに話すのだろう。しかも、俺は年上なんだろう？ もう少し、なんというか、尊敬とは言わないまでも、少しくらいの遠慮はあってもいいんじゃないだろうか。

それに、ついて来られるのは色々と厄介なんだ。

「なんで？ 嫌なの？」

「……………格好が目立つんだよ」

ビキニの水着にガウンを羽織っているだけ。そんなのが街中を歩いていたら、視線を釘付けにするのは考えなくてもわかる。一緒にいれば俺まで変人の仲間入りだ。

まあ、その辺は建前であって。ぶつちやけてしまえば、俺はこいつについてきて欲しくなかった。俺の楽しい楽しい高校生活を壊して欲しくなかった。

「そうかなあ。未来だったら普通だけどね」

「馬鹿にするのもいい加減にしるって」

「嘘じゃないって。現代いまの人間が内気すぎるんだよ」

誰かこいつをどうにかしてくれ。

そんなこんな話している間に、エレベーターは一階へと到着した。
自動的にドアが開く。
するとそこには。

「お前が藤崎正太郎だな」

俺の目の前には、サブマシンガンを構える黒服の男がいた。

Case 3 黒服

「やばい！死ぬ！殺される！」

「逃げるな」

「そりゃ、そんなもんぶつ放してきたら誰だって逃げるだろ！死んでしまうわ！」

「そのためにこうしている」

黒服の男がサブマシンガンを連射しながら追いかけてくる。街中に銃声が木霊する。

なんなんだよこれは。おかしいだろこんなの！

いたるところから悲鳴が聞こえてくる。そりゃそうだ。街中でサブマシンガンぶつ放しているやつがいたら、誰だって悲鳴を上げる。俺はもう泣きそうだ。

弾丸が俺の頭の真横を通り過ぎた。あと十センチ近ければ、俺は死んでいた。

「止まれ。楽に殺してやる」

黒服が静かに言い放った。

「死んでたまるかよ！つうか誰だよ、お前は！」

「お前に教える義理はない。とりあえず死ぬ。まずはそれからだ」
「死んだらそれで終わりだろうが！」

叫びながら逃走。立ち向かおう何て気はわからない。でてくるわけがない。

男は無表情で俺を追ってくる。滅茶苦茶怖い。ありえねえ。なんだこれ、どうして朝っぱらから銃で狙われなきゃいけないんだ！？青信号が点滅しかけている横断歩道を渡り、人ごみを避けながら走り回り、裏路地に逃げ込んで、橋を渡る。

それでも、男は追ってくる。

「あ、いたいた」

レイラが滑空していた。俺の真横を併走する。

「とんでもない事になってるねえ」

「あなたにとつては人事ですから？ そんな落ち着いていられるんですよねえ！？」

なんで俺があんな危ない男に命を狙われなきゃいけないんだ。

あの時、エレベーターの中で、俺の名前を呼んだかと思つたら、いきなりサブマシンガンを撃ってきた。殺意しか感じなかったからマシンガンをぶっぱなされる気がして咄嗟にしゃがんでいたお陰で避けた。もう少しで死ぬとこだった。すげえな、俺。ちゃっかり、あの未来人はバリアみたいなのを張っていた。

そのまま立ちふさがる男の足元の隙間をすり抜けて逃げた……と思つたら、なんと黒服がサブマシンガンを片手に追ってくるではないですか。

マジありえん。

「口調かわつてるよー」

あははー、とレイラが笑う。

くそ、やっぱり他人事かよ。ふざけるよ。

そうこうして逃げている内に、来たことのない場所に来てしまった。いりくねつた道を滅茶苦茶ににげる。

「死ぬ」

男が引き金を引いた。鉛の雨が俺に向かってくる。

「どあつ！」

「あぶないなあ」

俺は大きく左に跳んでそれを避けた。未来人は当然のように、自分にだけバリアを張っている。

「おい、俺も守れよ！」

「大丈夫だよ。正太郎は死なないようにできているから」

「はあ！？人は撃たれたら死ぬつての！」

もう駄目だ。こいつはアテにならない。

狭い道を走って逃げる。だがそれを続けている内に、壁が俺の前

に立ちふさがった。

「行き止まり……!?!」

「逃げてたら当たらないだろう」

そいつは不敵な笑みを浮かべている。慎重は俺と同じくらいか。髪の毛は無造作に伸ばされている。前髪で目がわずかに隠れていた。筋肉質な身体だが、太すぎるわけではない。いわゆる、細マツチヨというやつだ。目は獲物を狙う獣のようにギラついていた。もちろん、標的は俺だ。

「どうして俺を殺そうとするんだ」

俺は聞いてみたんだ。理由をわからないで殺されるなんて納得いかないから。

けど、黒服で細身のそいつは、全く俺の言葉なんて聞いちゃいなかった。

「ど、どうして君が……っ!」

目を見開き、宙を浮くレイラを見ていた。シカトですか。ああ、そうですか。

「あ、君、もしかしてソースケ?」

しかも知り合いなんですか。また電波ですか。

「へー。すごい変わったね。全然気がつかなかったよ。大人っぽくなったっていうか、実際大人になってるって言うか……あれ、もしかして、私がタイムスリップした数年後から来たの?」

「あ、ああ。まあな」

しかもこの電波未来人と話があつてるよ。こいつも同類なのかよ。「なんで正太郎の命を狙うの? まあ、多分死なないと思うけれど……それでもさ、手の一本や二本はなくなっちゃうんだから、止めたほうがいいよ」

物騒なことを言う。つーか、そう思うんだつたら、なんで守つてくれないんだ。この女は。

「……そうしたかったから、だな」

「おい、そんな理由で殺されたらたまらねえぞ」

「貴様は黙っている」

ソースケと呼ばれた男は俺のこめかみに銃口を突きつけてきた。

「……嘘です。ごめんなさい」

俺には発言権はないって事なんですか？ 酷すぎやしませんか？

もう嫌だ。なんなんだよ、この状況。

「土下座しろ」

男は無表情で告げる。

「は？ なんでそんなことしなくちゃなら」

「撃つ」

「やります。やらせてください」

「まあまあ。ソースケもその辺にしてさあ」

「君がそう言うなら」

レイラの言葉に、ソースケという男は素直に応じた。銃口が外される。

ほう、なるほど。この女の言う事だけは聞くのか。俺の言う事はシカトもしくは否定されるだけなのか。例え電波が相手だとしても初対面でそれは泣くぞ？ 思春期の男子は繊細なんだ。もっとデリケートに扱ってくれよ。

「それにしても、なんでソースケはこの時代に来たの？」

そんなことよりなんで俺を狙うのかだろ。まさかさっきの理由で納得したわけじゃないよな。

と、言おうとしたが、止めた。あまりいい結果を招かない気がしたから。

「いや……その……」

ソースケとやらは口をもごもごと動かしている。なんだ、こいつ。恥ずかしかつてるのか？

頬を赤くして俯いて ああ、なるほど。

「まさかこの女が好」

すさまじい反応速度で俺の校内に銃口がぶち込まれた。もちろん、やったのは黒服の男だ。

「それ以上言ったら殺す」

「ふうひいふあふえん……」

「わかればいい」

くそつたれ、大体わかつたぞ。

不本意ながらも、こいつらが未来人だと言うことを真実だとするならば。

レイラは俺を「良い独裁者」にするために未来からやってきた。

このソースケという迷惑野郎はレイラのが好きだ。で、追って来た。一緒に未来に帰りたいとも思ったのか、この男の悲願を達成する為に俺の存在が邪魔だと判断したのか、どちらにせよ俺が死んでるほうがこいつにとつて都合がよかった。だから殺そうとした。え、何それ。そんな理由で殺そうとしてくるとか、こいつ、やべえ。ある意味、ストーカーの亜種みたいなもんだらうか。

「うーん、よくわからないけど、仲直りしてみたいでよかったよ」
なにやらレイラがほざいているが、断じて仲直りなんてしていない。

まあいい。ここで余計な事を言うと、またサブマシンガン突きつけられそう。

「そうだ。正太郎、学校間に合うの？」

携帯で時間を確認した。八時十分だった。ホームルームが始まるのは八時半。あと二十分だ。

「あー、微妙。結構走ってきちまったし」

「そつか。じゃあ近くまで送ってあげるよ」

え、ちよつと待て。それは嫌だ。

この女はそこそこに人の目をひきつけるくらいの容姿は持っているし、それ以前に、服装が目立つ。おまけに、物騒なものを片手に握っている黒服までいる。

もしもその二人と一緒に歩いているのを目撃されれば、俺もそれなく変人奇人の仲間入りを果たしてしまう。そうでなくても、少なくともよろしくないわさの二つや二つ、立つだらう。そんなの嫌

だ、絶対に嫌だ。

「いいって。なんか悪いし」

「遠慮しないでよ。将来独裁者になるんだから、これくらいなんてことないって」

「ならねえよ！ともかく、俺は歩いていくから……」

歩き出そうと踵を返した瞬間、後頭部にひんやりとした違和感を感じた。

「人の好意は素直に受けるものだと思わないか？」

「ええ、そうですね……僕もそう思うんで、その物騒なものを突きつけないでください」

俺に選択権はないのか。もう色々諦めるしかないみたいだ。

「それじゃ、行くよ。ついてきてね」

行き止まりの壁に向かい、レイラはコンパクトを翳した。

僅かな米粒みたいな穴が壁に生まれる。それは見る見るうちに広がっていき、一人が通れるくらいの、大きな輪となった。その向こう側は何処か薄暗い所に繋がっていた。

レイラとソースケがその輪を通り、向こう側へと渡っていく。

ああ、もう好きにしろよ。未来技術つてすげえな。俺の理解を超えているよ。これは何だ？ ワープか？ 某ネコ型ロボット御用達のドアか？

「ほら、正太郎も早くおいでよ」

レイラが手を差し出してくる。とびっきりの笑顔で。

「あ、ああ」

俺も健全な男子高校生であって、しかも悔しい事にレイラは俺のど真ん中ストライクゾーンなわけで、なんというかその、ちょっとドキドキしてしまう。

でも、差し出されたその手を握り返しはしなかった。

理由は一つ。黒服の男、ソースケが物凄い目つきで俺を睨んでいるからだ。

その手を握ったら殺す。わかっているな？

声には出していなかったが、そう聞こえた。

「どうかしたの？」

「いや、なんでも」

輪をくぐり、薄暗い場所に出る。直後、俺達の通った輪は消えていった。

辺りを見回す。誇りっぽい場所だった。汗臭くもある。様々な道具の影が見える。

「ここは……体育倉庫か？」

「あたり。大正解だよ」

レイラが倉庫の扉へ手をかけた。

「おい、ちよつとまって」

扉を開ける前に、俺は声をかけた。

「その格好は目立って言ったろ。やめとけよ」

ビキニにガウンの中学三年生が校舎をうろついたら、騒ぎになる事は間違いない。

「うーん、そんな大変な事にはならないと思うけど……」

「問題ないだろう」

未来人（自称）二名は俺の言う事が納得でないようだ。

面倒な事になるんだよ。お前らは感覚が狂ってるからわかんないだろうけどな。

「まー、わかつたよ」

レイラの身体をいくつもの繊維が包み込んだ。それは学校のそれも、俺の学校の 女子生徒の制服となる。

その光景を目の当たりにして、全く動じない俺がいた。なんか、感覚が麻痺しかけてるみたいだ。

「言っとくけど、お前らついてくんなよ」

「え、無理だよ」

「何を言っている？」

もう、こいつは二人には何を言っても無意味なんじゃないかって思えてくる。

Case 4 嵐の前の静けさ

昨日の夜からずっと散々な目にあっていたせいか、授業に安らぎを感じていた。

「えー、ここに $x=7$ を代入して……」

いつもは退屈で退屈で仕方がない数学教師の言葉でさえ、心地よく思えてくる。ぬくぬくとした教室の温度が眠気を誘い、まどろみが俺のまぶたを重くする。

黒板には数式がびっしりと埋められていた。教師の手には白いチョークと教科書が握られている。

机に突っ伏していたり校庭を見て授業を聞いていないのは俺を含めて数名だ。大半の生徒は真面目に授業を聞いてノートを取っている。この学校は進学校だし、当然といえば当然だ。

俺だって、いつもはちゃんとノートを取っているし、しっかりと授業を聞いている。

だけど、今日はそんな気になれなかった。この平和を全力でかみ締めたかった。

ちなみに、あの未来人達は「社会見学」とか言っただけに行っている。二時間目が終わるくらいまでは「できる君」という便利ツールによって透明人間となって俺の真横にいた。で、それに飽きた気まぐれな奴らだ。レイラは嬉々として街に繰出し、ソースケ若干口元を緩ませてついでいった。

というか、透明人間になれるんだったら最初からそうしてるよ。今は五時間目。まだあいつらは帰ってこない。俺としてはそっちの方がいい。むしろ、このまま一生帰ってきて欲しくない。あの変人たちは気のせいだったんだと思いたい。

「ふああ……」

欠伸が出た。なんかこう、落ち着く。こんなにも普通の生活がいものだとはおもわなかった。

「眠いの？」

真後ろから声をかけられた。まあな、と言いながら後ろを振り向く。

そこにはショートカットかつボーイッシュな女子生徒がいた。名前は月島ゆかり。小さい頃からの腐れ縁だ。聞いた話では遠い親戚なんだそうで、家族ぐるみでの交流が昔からあった。

ゆかりの家は俺の家から近い。中学生の頃くらいまではよくお互いの家に遊びに行っていた。

頻度は激減したが、今でも俺はたまに月島家で夕飯をご馳走してもらっている。

ゆかりの親父さんは道場の師範をやっている。一部の間では有名なスパルタ道場だ。年中門下生不足に苦しんでいるらしい。なんでも、入門しても二週間も持たないとか。

ちなみに、ゆかりはその道場でみっちり鍛えられている。情けない話だが、もしも俺とゆかりが喧嘩をしたら確実に負けるだろう。

一度、親父さんとゆかりの組み手を見たが、あれはもう人間の動きではなかった。

「珍しいね。シヨウが授業中に欠伸をするなんて」

ゆかりは俺のことをシヨウと呼ぶ。正太郎のシヨウだ。そこまていいあだ名だとは思わないが、ゆかりは気に入っているみたいだ。

若干恥ずかしいが、こいつにシヨウと呼ぶのを止めさせるのは無理な気がする。

「色々あったからな」

本当に色々あった。だからこそ、今は頭の中を空っぽにして平和を全身で感じていたい。

「ほうほう。色々ねえ。とても素敵な響じゃないですか。俺としてはとても気になるわけなんですけど、そのところ、詳しく説明してもらえませんかねえ」

ぐへへへ、と気味の悪い笑い方をしながら俺に喋りかけてきたのは、隣の席に座る天城^{あまぎ}効だ。

ゆかりと違って、こいつとは高校からの付き合いだ。悪い奴じゃない。ちよつと変態が行き過ぎているだけで、基本的には友達思いの熱血漢。誰かが困っていたら、すぐにすつ飛んでいくタイプ。今時珍しい男だ。

一言で言うなら、馬鹿。天城は勢いで行動している。この間なんか、去年同じクラスだったメガネの同級生（名前は確か佐藤。最近イメチェンしてメガネをやめてコンタクトにしていた）がカツアゲやされている現場を目撃し、全く何も考えずヤンキーに喧嘩を売ってしまったことがある。

天城はその辺のチンピラよりは腕が立つ。お礼参りといわれて十何人もの不良たちに襲われた時ですら、武器を持ったチンピラに取り囲まれても、天城は無事だった。俺はその現場にいなかったから詳しい事はわからない。だが、天城は密かに「化け物」と呼ばれている。どうしてそんなあだ名がついたかは、考えるまでもない。

そうは言っても、俺やクラスの面子がこいつに殴られてケガを負わされた、なんて事は一度もない。

普段の天城は凶暴というよりも、女好きにしか見えない。女なら誰でもいい、というわけではない。天城なりの譲れない拘りがあるみたいだ。両親が出会ってすぐに結婚したのとなにか関係あるらしいが、詳しい話は聞いたことがなかった。

けど、天城はとにかく惚れっぼいんだ。天城自身はなかなか純粹で、日ごろ変態発言を多々するわりには、恋愛に関しては夢見る乙女レベルの幻想を抱いている。

だが、告白、玉碎、告白までの間隔が短い為に、日ごろの言動とあいまって、ただの軽い奴として見られてしまう。

「教えてくださいよお、藤崎さん。やっぱりアレですか。彼女でもできたんですか？」

「ないないないない。シヨウに限って、それだけは絶対にない」
ちげえよ、と口を俺が開く前に、ゆかりが全力で否定した。

「おい、ゆかり。いくらなんでも、それは酷くないか？」

「じゃ、彼女できたことあんの？」

「……ねえよ」

それを言われると何もいえない。幼馴染って奴はそういうことまで詳細に知っているから困る。

「それに、シヨウに甲斐性なんてものはないから」

「あー、それはわかる。煮え切らないもんなあ。何にしても。きっと、女を連れ込んでそこから先までは絶対にいかないね」

ほっとけよ、と俺は思う。そんなことお前には関係ないだろう。

大体、お前は人のこと言えるほどのな。下ネタはOKでも、恋バナなんてしたらすぐに顔赤くするくせによ。彼女できたとしても、手を繋ぐ事すら抵抗感じそうだよな、テメエは。

「きっと、美少女に迫られたって逃げ出すよね。間違いない」

心臓が一瞬、強くはねた。あてずっぽうで適当に言っているのだから、俺の脳裏に今朝の光景が浮かぶ。

「おい、そこ。静かにしろ」

黒板の前に立つ教師が、俺たちに視線を向けていった。天城が「はい」と間延びした適当な言葉を返す。教師は一瞬顔をしかめたが、すぐに黒板に向き直った。

「大人の階段を上った感想は後でじっくり聞かせてもらっせ」

つくづくこいつは馬鹿だよな。そんなこと、ねえってのに。

「だから言ってるじゃん。シヨウに限ってそんな勇氣あるわけないって」

ゆかりの口調は若干若干むきになっていった。全力で否定したいみたいだ。

確かに俺とお前は付き合いが長いよ。俺が彼女なんてできた事ないのも知っているだろうさ。でもよ、そこまで言わなくなっちゃったっていいだろう……実際その通りなんだけどさ。

などと考えていたら。

何かが破裂するような音共に、校舎が縦に強く揺れた。

「地震か!？」

誰かが叫んだ。だが揺れは一回、大きなものがあっただけだった。変わりに聞こえてくるのは発砲音。ついさっきまで平和だった校舎内に、サブマシンガンの渴いた音が鳴り響く。女子の、そう、多分中学三年生くらいの女子の声が反響する。

誰の仕業かは考えるまでもない。

頭痛がした。

Case 5 超能力者

ああ、俺は夢を見ているんだろうか。

「この、よくもー！」

レイラの叫び声が三階のこの教室まで聞こえてくる。

今は授業中のはずで、けれど多分、学校のほぼ全ての生徒が校庭へと視線を向けているだろう。教師がそれをとがめる事もない。生徒たちと同じように、窓の外に釘付けになっているはずだ。

教室の中の全員が窓際にへばりつくようにして校庭を見下ろしていた。俺はその最前列でその光景を目の当たりにしている。

「えー……マジかよ……」

天城がげんなりとした表情で呟いた。じんじられない、と言うように。俺も同じ気持ちだよ。多少お前らよりは状況がわかるけど、でもやっぱり、何かがおかしいと思う。

「あれ、何なの？」

ゆかりが指差した先には、巨大な大砲を抱えるソースケがいた。連続で引き金が引かれ、数発のミサイルが飛んでいく。

その横ではレイラがコンパクトを構え、そしてそのコンパクトからビームを発射していた。

目標は校庭に突っ立っている三人。直撃すれば恐らく即死である。うその攻撃を、二人の未来人は躊躇いもなくぶっ放した。

「おいおい、あいつら冗談だろ？」

しかし攻撃は真っ直ぐに目標に向かっていく。

直撃。轟音。振動。校庭に土煙が舞い上がった。教室にざわめきが走る。

「おい、なんだよあれ」「テレビ撮影？」「バカ、そんなのあるわけないだろ」「だったらなんだよ」「イタズラなんじゃないの？」

「火薬つかったのかなあ」「アレなんだよ。ロケットランチャーか

？」「あれで人、生きてるのかよ」「あの女、うちの制服着てるぞ」
頭が痛い。訳がわからない。

いきなりやって来たかと思ったら、散々引っ掻き回してどっかに消えて。帰ってきたと思ったら校庭でドンパチやらかして。しかも、殺人まで……

「おい、あれ見ろよ！」

クラスの誰かが叫んだ。その声に反応して、教室中の一箇所に眼差しが向けられる。

空中に三人の人間が浮かんでいた。

え？

「人が、飛んでる？」

ゆかりが眉をひそめながら言う。その言葉を口にしたのは、誰かに否定してもらいたかったからだろうか。

だが、誰も否定できない。人は確かにそこに浮いている。

三人は競泳水着みたいなスーツを全身に纏っている。赤みの掛かった髪と薄い茶色の男が二人、金髪の女が一人。遠目からでも、顔立ちから何から、日本人ではないのがわかる。

それにしても、なんて格好なんだろう。身体にフィットしすぎている。黒と灰色の配色が入り混じったスーツは、正直まともな奴が着るものとは思えない。コスプレか何かなのだろうか。

いや、そもそもなんで、どうやってあいつらは宙に浮いているんだ？ まさか、またあの未来人たちの関係者なのか？

「落ちろ。貴様らは邪魔だ」

その間にも、レイラとソースケが一斉射撃を行っている。無数のビームが三人に向かい、鉛の雨が重力に逆らって襲い掛かる。

だが、三人は何をするわけでもなく、ただそこにいた。ビームや鉛球が自ら避けていくのだ。

未来じゃ普通なんだよ、超能力者。

レイラの言っていたことが思い出される。そういうことなのか？
また、お前らの関係者なのか？

「勘弁してくれ……」

もううんざりだ。俺はもう、あいつらと関わりあいたくない。

そもそも、俺が独裁者だと？ 俺は親父や教師をあいてにですら反抗した事がないんだぞ？ その俺が、そんな俺が、どうして独裁者なんだよ。

三人の内の一人、赤みを帯びた髪の毛の男が地面へ降下した。同時に、金髪の女と茶色い髪の毛の男がどこかへ飛んでいく。

「いかせるか！」

「逃げるな」

レイラとソースケがその二人に向かって引き金を引いた。しかしそれらは目標に命中する事はなく、自ら不自然に上空へと逸れていく。

二人は難なく攻撃をかわし、何処かへ消えていった。屋上の方に向かったみたいだが、ここからじゃ正確な位置はわからない。

「なあ、もしかして、学校の中に入ってきたのかな」

天城がそう言った直後、放送のチャイムがスピーカーから鳴り響いた。

「早川さんがいらつしやいました。早川さんがいらつしやいました」
若干震えた声のその放送は、学校に誰かは侵入したことを意味している。

学校で決められている、不審者が侵入したときの為の暗号的な放送。学生なら殆どが知っている。

「早川さんって、空を飛んでたあいつらのことだよな」「本当に飛んでたの？」「全部、作り物なんじゃねーの？」「よくできたグラフィックとか」「何のためにそんな事するんだよ」「だってビームとかなんてありえないし」「空飛べるわけないし」「でも、現に飛んでたけど」「ありえない」「夢じゃないよな」「集団幻覚？」「みんな、とりあえず落ち着け！」

ざわめく教室を、教師が一括した。しかしその声は震えている。動揺しているのが丸わかりだ。

窓の外では、レイラとソースケが一人残った男に対して銃撃を浴びせていた。しかし男はその全てを弾き飛ばしている。超能力者だとするのなら、恐らくサイコキネシスと言っやつたろう。

外人の男は無言のまま二人に歩み寄る。手ぶらだ。その手を二人に向けて翳した。

そして瞬間、レイラの身体が吹っ飛んだ。ソースケは重火器の重みと踏ん張りでなんとか耐えたようだが、直後に一瞬で接近してきた男に顔面を蹴り飛ばされた。

ほぼ同時に、悲鳴が校舎の中に響いた。この階の一番端の教室からだ。

理由はすぐにわかった。やつらが、教室の扉を弾き飛ばしたからだ。「藤崎正太郎はここだな？」

金髪の女の方が言った。日本語だ。その口調は厳しい。

教室に二つの意味でどよめきが走る。金髪でボデイルイン丸見えのスーツを着た不審者がやってきたのだ。不審者かつ、金髪コスプレ外人。なんだこれは。

「オイオイ、ステラ。皆さん怖がっているじゃないか。少しは事情を説明したらどうだい？」

隣に立つ茶色い髪の男は、外国人とは思えないほど、流暢で軽快に、明るく日本語を話している。そいつの服もボデイルインを強調している。一部、もっこりしている場所があるが、つつこんではない。

「黙れ。お前の力を使えばどれが目標なのかわかるだろう。早く教えろ」

「ステラ、君は何度言ったら」

「早く教えろといっている」

金髪の外人ねーちゃんが茶色が見の男に詰め寄った。喧嘩かよ。なら、どこか他所でやってくれ。

「ノー、そんなに起こるなって。可愛い顔が台無しじゃない。君もそう思うだろ？藤崎正太郎」

まただ。また、俺の名前を呼びやがった。あいつらは一体

「何者なんだろうか。ってね」

茶色髪の男が、突然俺に向かつてウインクをしてくる。いや、それよりも今あいつ、俺が思っていたことの続きを口に出しやがったぞ？超能力ってまさか、そんな。

「そのまさかだったりするかもね」

茶色髪が寄ってくる。金髪の、ステラと呼ばれた女性も一緒に。

生徒が散り散りになる。俺は動けなかった。身体が動かせなかった。まるで、何かに押さえつけられているかのよう。

「君が特異点かあ。そんな風には見えないけどね」

「何でもいい。サミュエル、さっさとこいつを回収しろ。撤退するぞ。あまり目立ちすぎても仕方がない」

茶髪の男の手が俺へと伸びてくる。さっきから何言ってるんだよ。特異点って、あの、レイラが言っていたアレのことか？歴史の決定事項って奴。それに、回収？俺をか？一体、どこに連れて行くつもりだよ。

逃げようとしたが、身体は動かない。瞬きすらできなかった。金縛りにあっているかのようだ。

ヤバイ。なんだこれ。超能力って奴か？そしたら俺、つかまるしかないんじゃないか。

「シヨウから離れる！」

俺と外人たちの間を、何か黒いものが通り抜けていった。それを目で追う。ああ、クナイか。なるほどね……は？クナイ？

えっ？

痛てえ。骨が折れるかと思った。しかも地面に頭ぶつけるし。た
んこぶできたし。スリーサイズどころでの話じゃねえ。

何時の間にか、身体は動くようになっていた。さっきまでのあれ
はなんだったんだ？

「ねえ、何考えてんの？信じらんない！女子高生のトップシークレ
ットをばらすなんて！」

「秘密にするほどもないだろうが……」

「何が!？」

「いえ、何も」

やっぱり、こいつはゆかりだった。

口元を隠しているが、明らかにゆかりだ。十年以上も付き合っ
ているんだ。口元が隠れたってわかっちゃう。

ゆかりは忍び装束を着ていた。写真とか漫画とか、そんなとこで
しか見たことのないやつだ。なんでお前そんなもの持つてるんだよ。
制服はどこへやったんだよ。その前に、いつ着替えたんだ？

「てかさ、なんだよござるって。無理ありすぎるだろ」

「わ、私だって嫌だったんだよっ？だって、父さんがそうしろって
いうから……」

その割には楽しそうに喋ってたなあ、オイ。

「あのね、今まで黙ってたけど、私達月島家は、忍者の家系だった
んだ。先祖代々、藤崎家を守る事がが使命なの」

「だからお前も俺を守ってくれたって言うのか？」

「うん。なんかシヨウ、物凄く物分りがいいね」

そりゃあな、変人奇人共がこれだけ出てくれば、さすがに耐性だ
ってつくってもんだ。

「見つけた！そこだね、ハットリボーイ……アレ、これはくノ一ガ
ールか？ま、どっちでもいいさ！サインくださいさーい！」

サミュエルとかいうのが俺たちを追って走ってきた。こいつもこ
いつで超楽しそうだな。目を輝かせて。息を切らせて。馬鹿か？こ
いつ？

「いい加減にしろ、サミュエル。私達の目的は特異点の捕獲だ」

茶髪から僅かに遅れて、金髪の姉ちゃんがやってきた。

強調されているボディラインにどうしても目が行ってしまう。なかなかいいスタイルをしているな。出る所は出でて、締まるところは締まっている。レイラはまだ中学生と言っただけあって童顔だが、こっちは大人っぽい。これはこれで、ありだな。

「む……なんだ、藤崎正太郎」

「シヨウ、さつきからどこみてんの？」

それにくらべて、ゆかりときたら。残念ボディにもほどがある。

「今鼻で笑った！笑ったでしょ！」

「あー、くノーガール。そろそろ本題に入らせてもらおうよ」

咳払いをしつつ、茶髪のサミュエルが言った。

「藤崎正太郎。君には不思議な力が働いている。あらゆるものが君にひきつけられていると言えればいいのかな。君のその身体を調べさせて欲しい。素直に俺たちに応じてくれれば、野蛮な事はしない。多分」

「多分？多分ってなんだよ」

「いや、こっちの女性の血の気が盛んというかなんとか……」

「どっちでもいいよ、そんなの！シヨウは渡さないから。シヨウはアタシの玩具だからね？」

あっはっは。何を言ってくれているんだゆかりさんは。俺は君の所有物になった覚えはありませんよ。

懐から取り出したクナイを構え、ゆかりは俺と外人二人の間に入る。ちよつと待て。なんだこのムードは。

「そうか。それならば仕方あるまい」

ステラと言う金髪ねーちゃんが手の平をこちらへ向けた。その顔は楽しそうに笑っている。闘える事が嬉しいというように。そして。

「きゃっ！」

ゆかりの身体が吹っ飛んだ。突然、前触れもなく。

「ゆかり！」

超能力、なのか？

そういうこと。だから俺たちには絶対敵わない。OK？

頭の中でサミュエルの声がした。これは、テレパシーってやつか。

ステラはサイコキネシスが使える。俺が使えるのも、テレパシーだけじゃない。大人しくしていた方が身のためだぜ。あのくノ一ガールにもそう言っておいてくれよ。

「もう、何なのこれ。父さん、私聞いてないよ！」

ゆかりが駆け足で戻ってくる。もう復活したみたいだ。こいつ、意外とタフだな。

「おい、ゆかり。そいつら超能力使えるってよ」

一応、言ってみる。でも俺は知ってるんだ。ゆかりはこういつたって聞かないってことは。

「うっさい！父さんから受け継いだ月島流が、そんなアホみたなものに負けるわけない！」

ゆかりは自分の家の武術に絶対の自信を持っている。世界最強を信じて疑わないくらいに。

忍者の家系とか馬鹿らしいと思うが、それだけはよく知っている。だから引くわけがない。自分が負けるということが、どうしても許せないタチなんだ。

「アホだって？くノ一ガール、今君は、世界中の超能力者を敵に回したよ」

「世界中にそんなに超能力者がいるわけねーだろ」

いたらいらたで怖い。

シャラップ、特異点。君の頭の中でアルミホイルを噛み潰す音を延々と流し続けるぞ。

止めてください。お願いします。

わかればいいよ、わかれば。

クソ、こんなしょうもない脅しにテレパシーなんか使うんじゃないよ……

「そういつわけなんだ。ごめんよ、くノーガール」

「御託はもういい。始めるぞ」

ステラが廊下を駆け、ゆかりへと詰め寄った。手の平を翳し、目に見えない力でゆかりを吹っ飛ばそうとする。やっぱり、超能力。だがそれよりも驚くべきなのは。

「な、早い!？」

ステラが驚愕の声を上げる。俺だって驚いた。ゆかりが突然に消えたのだ。

「遅いよ」

ステラの背後へと突如現れたゆかりは、そのまま手刀を首元に打ち据える。まさに早業、目にも留まらぬ速度だった。

「まさ……か……」

ステラが気を失い、廊下へ倒れていく。

「ステラ!」

サミュエルが叫ぶ。それに反応してか、ステラが目を見開き、地面に衝突する寸前の所で持ち直した。超能力か何かをつかったのだろうか。

「すまない、助かった」

「あのくノーガール、伊達じゃないぞ」

「ああ、わかつている。油断しただけだ」

サミュエルがステラの肩を抱いている。やばい、これ、あいつらを本気にさせちまったんじゃないのか？

などと考えている内に、俺はゆかりに抱きかかえられていた。

俺が全力で走っても追いつかないようなスピードでゆかりは廊下を駆けていく。その顔は真剣そのものだった。

「逃げるが勝ちだよ、シヨウ。あいつらに捕まったら、何をされるかわからない」

「……お前、何か知っているのか？」

「うん。まあ、一応ね。あいつらの言っている意味も大体わかる。

まさか超能力者だとは思わなかったけど。とにかく、シヨウをあい

つらに渡すわけにはいかない。仲間のとこまで、一気に案内するから」

仲間？仲間だって？これ以上変な奴が出てくるのかよ。

というかこの状況。くノーにお姫様抱っこをされながら逃げているって、相当恥ずかしいな。

などと考えていたら、突然、ゆかりがその足を止めた。慣性力よろしく、俺の身体が前にもっていかれそうになる。

「おい、どうしたんだよ一体」

「敵だ。あいつ、やばい」

ゆかりの声を聞き、前へ視線をむける。

そこには見るからに筋肉質な、というかありえないほどに筋肉隆々とした男がいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0544ba/>

Chaos!!

2012年1月2日11時49分発行